年間第十八主日

2020.8.2

マタイ 14・13-21

カトリック高円寺教会
主任司祭　吉池好高神父

今日の福音は、イエスが５つのパンと２匹の魚をもって５千人を越える人々の飢えを満たしてくださった奇跡の物語です。洗礼を受ける前に、あるいは、洗礼を受けてからのことかもしれませんが、初めて福音書のこの物語を聞いたとき、今日のこの福音はわたしたちの心にどのように響いたでしょうか。あの最初の、驚きと戸惑いを感じたはずの時から、時が流れて、その間に多くのわたしたちは洗礼を受けて、イエス・キリストを信じるカトリック信者として生きてきました。その後も、幾度となく聴いてきた今日の福音は、今、わたしたちの心にどのように響いているのでしょうか。あの最初のころに感じた驚きと、素直にそれを信じることの出来ないでいた戸惑いを想い起こすと、その自分が今こうして信者になっていることの不思議さを感じざるを得ません。どのようなことがあったから、わたしたちはあの最初のころの戸惑いを乗り越えて、今日の福音が語っているイエス・キリストへの信仰を生きる者なったのでしょうか。そして、そのような者とされたわたしたちの心に、今日の福音は、今、どのように響いているのでしょうか。このミサの中で、あらためて今日の福音について思い巡らしながら、あわせて、わたしたちのカトリック信者としての信仰の不思議さについても想いを向けてみたいと思います。このように言うのは、今日の福音に語られていることが、カトリック信者としてのわたしたちにとっても、あまりにも信じがたいと思われることだからです。

今日のマタイ福音書に記されている出来事は、他の３つの福音書にも記されています。これらの福音書は、そこに記されているこのような奇跡を行われたイエス・キリストを信じる最初の教会の中で、その信仰に人々を招き入れるために書き記されたのです。福音書が証するイエス・キリストへの信仰において、イエスは確かに今日の福音に語られているような驚くべきことを行われるお方です。けれども、５つのパンと２匹の魚をもって５千人を越える人々の飢えを満たしてくださったという、今日の福音に語られている出来事は、もう一度だけ語られている、７つのパンとわずかな魚をもって４千人を越える人々を養ってくださったという同じような奇跡の物語（マルコ 8・1-9）を除けば、イエスを信じる者とされた人々が日常的に経験したことではありません。イエスが行われた奇跡の業を伝える福音書は、イエスを信じる者たちには、ここに語られ

ているようなことが、文字通りそのまま彼らの日常の生活の中で起こるということを本気で語ろうとしているのではありません。むしろ、イエスを信じる者たちの間で伝えられてきたこのような物語の中のイエスこそ、わたしたちが信じるイエス・キリストであることを示すために福音書は書き記されたのです。そのことを理解する糸口は、今日の福音の中に示されています。

イエスのおことばに従って、弟子たちが差し出した５つのパンと魚をお取になったイエスは、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。そして、弟子たちはそのパンを人々に与えたと今日の福音は語っています。福音書のこのような語り方には、イエスを信じた最初の教会が他の場面でもっと頻繁に経験していたことが反映しています。それは言うまでもなく、最後の晩餐のイエスのことばに基づいて、最初の教会のときから行われてきたパンを裂いてそれを分かち合うイエスを信じる者たちの間で受け継がれてきた独特の儀式、つまり、今のわたしたちにも受け継がれているミサの中で、わたしたちも経験している事柄です。最後の晩餐の場面でもイエスはパンを取って、今日の福音に語られているのと全く同じ所作をされ、これはあなたがたのために渡されるわたしの体であるというおことばをもって、弟子たちにそれを裂き与えられたのです。そして、そのイエスへの信仰を受け継ぐ今の教会のわたしたちは、ミサの度ごとに、同じ信仰に結ばれて、イエスの聖体によって養われているのです。今日の福音は、そのような教会の信仰に生きるわたしたちに、わたしたちがミサのたびに経験していることが、いかに驚くべき信仰の神秘に包まれたものであるかをあらためて示そうとしているのです。

今日の福音は、人里離れた所に退かれたイエスと、そのイエスの後を追って、イエスのもとに集って来た人々にイエスがなさってくださったことを語っています。人里離れた所とは、わたしたちが生きているこの世の社会から離れたところということでしょう。わたしたちが生きているこの世の社会は、洗礼者ヨハネが牢獄の闇の中で、人知れずに時の権力者であるヘロデの手にかかって平然と首を切られるような社会です。イエスはそのような人々の住むところを離れて、人里離れたところに退かれたのです。それは、イエスの方から、ご自分を慕う人々をそのようなところに連れ出そうとされてのことだったかもしれません。ご自分の後を追ってきた人々をイエスは深く憐れまれたと福音書は語ります。そのイエスの想いに包み込まれるようにして、イエスのもとに集った人々は、日が暮れかかっていることにも気付かぬほどに、イエスのもとに留まり続けたかったのでしょう。そのような人々がうらやましく思えるかもしれません。けれども、福音書はここに語られている人々とイエスの関係は、このような社

会の中に生きる、イエスを信じるわたしたちとイエスとの関係であることを示そうとして、この出来事の場面を設定したのではないかとも思われます。

わたしたちも、イエスへの信仰を受け入れてカトリックの信者となった時から、日常の生活を離れて、日常の生活で傷ついた心奮い立たせるようにして、イエスが裂き与えてくださるいのちのパンを求めてミサに通い続けています。わたしたち一人ひとりに向けられているイエスの想いは、あの時、人里離れたところにおられるご自分のもとに集って来た人々に向けられたのと同じ想いであることを、信仰のうちに受け止めさせていただきたいと思います。